

しまくとうば継承としまくとうば劇

石原昌英（琉球大学）

1 はじめに

本稿は昨年度（平成29年度）の事業報告書で発表した「しまくとうば劇の効果について」（石原：2018）に引き続き、しまくとうば復興の観点から、しまくとうば劇の可能性について分析する。石原（2018）では、10代・20代の若者がしまくとうば劇に演者・地謡として、しまくとうば劇に参加することにより、自分たちが生まれ育った地域のしまくとうばであるウチナーグチ（沖縄語）に関する言語意識や言語行動がどのような変化したのかを論じた。また、しまくとうば劇に演者として参加したハワイ出身の沖縄系米国人4世へのインタビューの分析を通して、しまくとうば劇の言語面での効果を分析した。本稿では、しまくとうば劇に演者として参加している、劇団代表の50代男性へのインタビューを分析することにより、しまくとうばの普及（復興）のしまくとうば劇の関係性について論じる。

2 しまくとうばの状況

しまくとうば（琉球諸語）が消滅の危機に瀕していることは琉球新報（2017）や沖縄県（2017）の全県規模のアンケート調査の結果が示している。いずれの調査報告でも、しまくとうばに対する理解度が低下し、話者数も減少していることが示されている。特に若い世代（10代・20代）でしまくとうばが話せる、聞いて理解できる者の割合はかなり低い。例えば、琉球新報（2017）によると、アンケート調査に回答した20代でしまくとうばを「聞くことも話すこともできる」と回答した者の割合は7.5%で、「まったく聞けないし、話せない」と回答した者の割合は25.4%であった。また、沖縄県（2017）によるとしまくとうばを「よくわかる」と回答した者の割合は10代が0.8%で20代が2.5%である。一方で、いずれの調査でも、しまくとうばに対する親しみや子供たちの継承への期待については80%以上が肯定的な回答をしている。このようなアンケート調査の結果をみると、しまくとうばが維持継承されることが期待されているが、継承する若者の数が非常に少ないので、しまくとうばの危機的状況はさらに悪化するということが予測される。

しまくとうばの危機の状況については地域差がある。琉球新報（2017）及び沖縄県（2017）は全県的な調査の報告であるが、市町村毎のデータも示している。例えば、前者によると、沖縄島北部地区においては、45.9%の回答者が「聞くことも話すこともできる」と答え、5.5%が「まったく聞けないし、話せない」と答えている。一方、八重山地区では、25.4%の回答者が「聞くことも話すこともできる」と答え、15.3%が「まったく聞けないし、話せない」と答えている。また、沖縄県（2017）によると、しまくとうばを「よくわかる」と回答した者の割合は調査全体でみると18.1%であるが、八重山地区では11.2%となっている。ここでみられるような地域差についてかりまた（2014a:274）は次のようにのべている。

40年近く琉球各地の方言を調査してきて感ずるのは、マイノリティのなかのマイノリティの方言の危機だ。ちいさな個性的な方言のなかには存在した証しさえのこさないまま消えてしまったものがある。わずかな記録をのこして消えていこうとする方言もある。個性的な弱小方言は、日本語と大方言からの二重の圧力をうけていて、消滅危機度がきわめてたかい。琉球諸語の多様性が失われようとしている。

後述するように、しまくとうば継承の観点からしまくとうば劇を演ずることについては、この「地域格差」の問題は、さけて通れない。

3 ことばへの気づき

石原（2018）のインタビュー調査に協力した若者達は例外的な存在と言えるが、彼・彼女達のしまくとうばに対する関心を深め、言語意識の変化をもたらしたのはしまくとうば劇である。若者達は劇の上演にいたる練習や関連する学習を通して、地域のしまくとうばへの気づきを経験した。いままで「昔のことば」「祖父母世代のことば」であって自分たちには関係のないことばであると思っていたものが、自分たちの周りで実際に使われていること、日本語とは異なるそのことばを使うことで年配者とのコミュニケーションがより深まることに気づき、次は自分たちの周りに広めたいと思うようになったのである。後述のインタビューでも述べられているように、学校教育において、児童生徒がしまくとうば劇に演者として参加することは、沖縄県には自分たちの母語（第一言語・生活言語）である日本語とは異なる言語が存在し、実際に使われていることを知る機会となる。劇を上演する目的の一つが児童生徒の「ことばへの気づき」をうながすことにあると言える。

4 インタビュー

本研究におけるインタビュー調査の概要は下記の通りである。当初は複数人にインタビューをする計画であったが、より深い分析をするために、一人だけに絞った。なお、インタビュー協力者の氏名を記すことについては承諾を得ている。

期日：2018年8月20日

対象者：上江洲朝男（演劇集団創造代表・元中学校教員（国語）・琉球大学教員）

時間：約1時間

質問

1. 琉球諸語（琉球諸方言）の現状をどう見ているか。
2. しまくとうば普及センターの波照間氏は、しまくとうば芝居に一つの可能性がある」と述べている。このことについてどう思うか。
3. 昨年度に「椎の川」をウチナーグチで上演したが、その目的は何であったのか。
4. 演者は稽古に入る前にどの程度のウチナーグチ能力を持っていたのか。その能力は、稽古を通してどう変わったのか。

5. ウチナーグチ能力の向上（があったと仮定して）以外に、演者の沖縄人意識が高まるというような効果もあったか。
6. ウチナーグチ（しまくとぅば）芝居を上演する上で、どのような課題があるのか。それはどのように解決できるのか（可能性も含めて）。
7. 観客の反応はどうであったか。ウチナーグチのセリフを観客が理解できるようにするために、どのような工夫がなされたのか。
8. 小学校・中学校の児童生徒がしまくとぅばを上演することについてどう思うか。もし、上演できたら、児童生徒のしまくとぅば能力の向上にどのような影響があると思うか。
9. 上演に関して、課題があるとしたらどのようなものか。その課題はどのように解決できるのか（可能性も含めて）。
10. しまくとぅばの普及促進について、何か提言等がありますか。

上江洲は、質問1に関して、琉球諸語は危機的な状況にあるが、若い世代が今話されていることばを受け継ぐ可能性はあるが、戦前や沖縄戦（1945年）直後に話されていたいわゆる「伝統方言」を引き継ぎ、「元に戻す」ことは困難であるとみている。「伝統方言」は、方言札も使われた戦前の標準語励行運動と戦後の共通語励行運動で継承が寸断されているので、寸断前のことばを取り戻すことは困難である。若者は自分たちが興味関心のあるものは引き継いでいくので、若者が興味関心を持つようにするには何が必要かを検討する必要がある。

質問2については、上江洲は次のように述べた。観客と演者は分けて考えるべきである。芝居は非日常的なものなので、それを見るだけでは、しまくとぅばを話せなかった観客が生活言語として使うようになれる可能性は非常に低い。一方で、演者は、発音・リズム・イントネーションを指導され、舞台の上ではあるが、生活と言語がつながっていることを学び、知らなかったことを知るようになるので、生活言語としてしまくとぅばを使えるようになる可能性はある。

質問3については、上江洲は次のように述べた。1945年の沖縄戦当時の生活、人々の感情、愛情表現、悲しみの表現を観客に体験してもらうには、当時のことばの発音、リズム、イントネーションで表現するのがベストである。大城貞俊作の『椎の川』はこれまでに3回上演されているが、最初の上演は知念正真が脚本を書いた、台詞のところどころにしまくとぅばが入る劇であった。2回目は作者の大城貞俊が脚本を書いたものが上演された。昨年の上演では、1回目の知念正真の脚本を又吉英仁が前編しまくとぅばに翻訳した。創造は、近年ではしまくとぅば劇を上演しているが、これはしまくとぅばが失われているといくことを懸念し、残さなければならないと言う必要性にかられたものだと思う。（年配の）メンバー達が年齢を重ねてたどり着いた答えである。

質問4について、上江洲は次のように述べた。『でいご村から』の上演（2014年）に際しては、自分（上江洲）は主役級の役を演じたが、当時はしまくとぅばを話せなかった。ほかの演者には琉球舞踊の経験者やうちなーぐち芝居の経験者がいて、演者のしまくとぅば能力の差が大きかった。自分は、発音、イントネーション、アクセントを徹底的に指導

された。その結果、しまくとうばに対して興味・関心があったはずだが、だんだんしまくとうばが嫌いになっていく自分がいることに気がついた。指摘・指導されるということは評価されるということであるが、自分が声に出した台詞が当たっているのか、当たっていないのかが不安になった。当時中学校の国語教員であったが、評価があることが「好き」「嫌い」を分けてしまう、言語なのに評価があっているのかと考えた。

また、『でいご村から』の舞台（場面）は山原（沖縄島北部）なのに劇で使われることばは中部のことばであることも気になった。関係者（演者・指導者）の多くが中部出身であることが、沖縄島内でのしまくとうば話者は中南部に多いというのが理由ではあった。舞台では一つの家族なので、ことばを一つにする必要はあった。ただ覚えて話すのではなく、生活で実際にしまくとうばを使っているかのように演じないといけなかったのでハードルがかなり高かった。稽古を通して、しまくとうば使用になれたが、日常的にしまくとうば話者である高齢者と接することがないので、覚えた台詞を舞台以外で使うということはない。ただし、講演等で例文として劇の台詞を用いることはある。

質問5について、上江洲は次のように述べた。若者が、劇に参加することでことばや沖縄っぽい動き（動作・所作）や文化・慣習を学ぶことで沖縄人意識を持つようになることはあり得ると思う。自分のような50代の者は、しまくとうばは元々自分たちのことばであったはずだと思っていて、それがどこかで途切れてしまっていて、別のことばにすり替えられてしまっているの、自分たちのことばであったはずのものを取り戻しているのではないかと思う。

質問6について、上江洲は次のように述べた。まず、しまくとうば劇を上演することの目的を明確にする必要がある。また、どこのどのことばで演じるのかについても理由付けをする必要がある。自分たちのことばを残したいという思いが強すぎると問題があるかも知れない。例えば、地域の公民館レベルで地域住民に地域のことばを知ってもらいたい、地域のことばを残していきたいというのでしまくとうば劇をするのであればその地域のことばで上演すべきであると思う。その場合には、演者・指導者は地域の住民であることが望ましい。一方で、様々な地域の人々が集まって上演する時には、どこのことばを使用するのかについての合意が必要である。ことばは本来日常生活のなかで継承されるものであるが、そのような継承ができなくなっていることが異常事態であるので、できるだけ日常生活と結びついたことばを残したほうが良いと考える。

質問7について、上江洲は次のように述べた。演劇集団創造がしまくとうば劇を上演するという事で観客は絞られてくる。若い人達にも伝えたいのに、観客はしまくとうばが分かる人達、舞台上で演じられる場面を懐かしく思う人達が多いので、観客の反応は良い。字幕も使用しているので、若者や県外出身者の反応も良いが、演じる者としては、観客には字幕ではなくて舞台上に注目してほしい。演出家には、字幕を嫌う者もいる。ただ、今の若者は意味が分からないと興味を示さないし、分からないままで劇を見るとずっといららしてしまう。そのことを考えると字幕は必要である。また、パンフレットにあらすじを載せたり、何らかの形でしまくとうばの台詞を抜き書きして示すことをしたりしている。

質問8・9について、上江洲は次のように述べた。児童生徒がしまくとうば劇に参加し、台詞を音声にしてしゃべってみたり、身体を使いながらしゃべってみたりすることで、しまくとうばを身近なものとして感じることは起こりえると思う。そこから、他にどのよう

なことばがあるのか、自分の台詞の「本当の発音」はどのようなものかに興味を持って調べることがあるだろう。ただ、だれがなんのためにしまくとうば劇を上演するののかについては、目的を明確にしておく必要がある。子どもの主体性を重視し、大人の目的のために子ども達を使ってはいけないと思う。その意味で、児童生徒がしまくとうばに興味・関心をもつような出会わせかたを考える必要がある。

指導者は、よりよい劇に仕上げたいので発音、リズム、イントネーションを少々厳しく指導してしまうかもしれない。そうすると、児童生徒の中には、しまくとうばを難しいことばであると思い、台詞をいうのが怖くなり、劇自体が楽しくないと思ってしまう者ができるかもしれない。指導が入るほど、しまくとうば（劇）が好きになっていく者もいるし、嫌いになっていく者もいる。後者のリスク・危険性があることを意識しながら指導する必要がある。

しまくとうば劇については、日本語の台詞のなかにとりどころにしまくとうばが入る劇にするのか、それとも台詞のすべてをしまくとうばにするのかを決め、いずれの場合でもなぜそのような劇にするのかについて、児童生徒に示すことが重要だと思う。指導者は、劇を通して、子ども達の方言に向かう態度を養うのか、それともことばを使う能力を養うのか、つまりしまくとうば劇の目的は何かを検討する必要がある。後者の場合には、一足飛びになってしまい、無理強いしてしまうことがある。指導者は許容範囲を広くすることが求められる。

質問 10 について、上江洲は次のように述べた。しまくとうばの継承については、継承する側（若者・子ども）の視点が重要である。子ども達が手を伸ばして、取りたいと思うようになることが必要である。継承させる側（大人）が「あげたい、あげたい」と思い渡しても、ただの押しつけであり、子ども達は自分が欲しいものでなければ捨ててしまうだろう。その意味で、出会わせ方が重要である。児童生徒がしまくとうばに興味・関心を持つようにさせることが学校教育に求められるべきである。学校教育では、地域には様々なことばがあることを教え、子ども達が言語の多様性を知る機会を与えることができる。「正しく」しゃべることまでを学校教育が担うようになってしまうと、そこには必ず評価が入ってきてしまうので、本当の意味での言語継承にはつながらないと思う。

現在の沖縄県においては、両親の出身地が異なる子どもは珍しくない。例えば、父親が宮古島市出身、母親は名護市出身で、子どもは那覇市で生まれ育つということがある。このような子どもが継承するしまくとうばは父親の出身地の宮古のことばなのか、母親の出身地の名護のことばなのか、それとも自分が生まれ育った那覇市のことばなのか。そもそも、大多数の子ども達にとって、日本語が第一言語（母語・生活言語）であるという現実のなかでしまくとうばを継承することにどのような意味があるのかを考える必要がある。

5 まとめ

今回のインタビューでは、筆者自身これまであまり重視していなかったことが課題として指摘された。まず、しまくとうば劇を上演する際に、どこで、どのことばで、どのようなテーマ（場面）を演じるのかということである。演劇集団創造が 2014 年に上演した『でいご村から』の舞台は大宜味村で、2017 年に上演した『椎の川』の舞台は国頭村楚洲である。

時代としては両方とも沖縄戦当時である。そのような舞台設定において沖縄島北部の国頭語（国頭方言・ヤンバル方言）ではなく、中南部のことばである沖縄語（ウチナーグチ）で上演されることの意味をあまり考えてこなかった。また、子ども達がしまくとうば劇に参加することをしまくとうば継承という観点からみた場合、どのことばを台詞に使うのが課題となる。首里方言・那覇方言がベースとなっているとされる、いわゆる沖縄芝居ことばを使うのか、学校が立地する地域のことばを使うのかを決め、その目的と理由が示される必要がある。沖縄芝居ことばを使った劇を宮古島で上演すること、逆に宮古島のことばを使った劇を沖縄島で上演すること、さらには宮古島のことばを使った劇を宮古島で上演することにはそれぞれの理由付けが求められるのである。次に、しまくとうば継承における劇の効果については、継承する側（若者・子ども）の視点が重要であることもあまり考えてこなかった。若者が劇に参加することはしまくとうば継承に関して効果があると石原（2018）で論じたが、インタビューに応じたのは主体的に劇に参加し、自ら進んで学びに参加した者達であった。学校教育の現場でしまくとうば劇を上演する場合には、参加する児童生徒に劇の目的を示す必要があり、音声面（発音・イントネーション・リズム）での指導が過剰とならないように注意する必要がある。子ども達がしまくとうばを嫌いになる可能性・リスクがあるからである。劇を通して、ことばへの気づきを経験させ、身近なものとなるようにすることができる一方で、遠ざけるようにしてしまう可能性もあるのである。言語継承の観点からしまくとうば劇を推進する場合には上記の課題を明確にし、なぜしまくとうば劇を上演するのかを考える必要がある。

参考文献

- ・石原昌英（2018）「しまくとうば劇の効果について」『平成29年度 文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」報告書』242 - 253 頁。琉球大学国際沖縄研究所。
- ・沖縄県（2017）『平成28年度 しまくとうば県民意識調査 報告書』
- ・かりまたしげひさ（2014a）「消滅危機言語の教育可能性を考える—多様な琉球諸語は継承できるか—」藤田陽子・渡久地健・かりまたしげひさ（編）『島嶼地域の新たな展望 自然・文化・社会の融合体としての島々』263-279。九州大学出版会。
- ・琉球新報（2014年4月9日）「初のうちなーぐち劇 演劇集団創造」
- ・琉球新報（2017）『沖縄県民意識調査報告書2016』琉球新報社。

¹ 演劇集団創造は1961年に幸喜良秀・又吉英仁・知念正真・中里友豪らによって設立された。設立後は日本語で演じる劇を上演してきたが、2014年に初めてしまくとうば（うちなーぐち）劇『でいご村から』を上演した。琉球新報（2014年）によると、設立者の一人で演出を担当した幸喜良秀はウチナーグチで劇を乗船することについて次のように述べている。

「『やまとに追い付け』とやまとぐちを勉強したが、母親の言葉に無頓着だった。（中略）沖縄の身体と心を復権する。（中略）芝居口調（くーちょー）（芝居で使われる言葉）は、近代にうちなーぐちの共通語になろうとしていた。村々の言葉を大事にしながら、共通語としてのうちなーぐちがあってもいい。

なお、演劇集団創造は、2017年に『椎の川』（大城貞俊作・1993年）をしまくとうば劇として上演したが、演出を担当した幸喜は、この上演について次のよう語っている（石原（2018）より引用した）。

観客に、しまくとうばを「いい言葉」として味わってもらうのも本公演の目的の一つだ。沖縄の言葉がなくなるという切迫感の中、私はこの演劇の「料理人」として、しまくとうばの素晴らしさを現代の人に知らせたい。／かつて沖縄の復帰運動の中で、しまくとうばが顧みられなかった時代もある。沖縄の言葉を大切にすることは、沖縄のアイデンティティを大事にすることでもある。／私たちには沖縄の言葉を教えてこなかった責任がある。だからこそ文化として回復させたい。」（『沖縄タイムス』2017/8/28）